

■ 4. シンポジウム

2023年3月5日（日）、今回の事業の総括会として、以下の内容のシンポジウムをバイト・ヤカンにて開催した。

□プログラム

- | | |
|----------------|-----------------------|
| 1. 11:30~11:50 | 開会 |
| 2. 11:50~12:00 | ファシリテーター講座修了者への修了証書授与 |
| 3. 12:00~13:00 | グループワーク |
| 4. 13:00~13:30 | グループワークの結果発表 |
| 5. 13:30~14:00 | 結果発表に対する意見・講評 |
| 6. 14:00 | 閉会 |

□参加者

コミュニティ（女性9名、男性8名）、ファシリテーター（11名）、その他（22名）
（別紙を参照）

□開会

アラール氏

- 本日の参加者に深く感謝を申し上げる。
- 今日のシンポジウムでは、これまで1年にわたり開催してきたワークショップの総括として、4つのテーマに沿ったグループにわかれてスーク・シラーハの将来について討議したい。
- 住民の意見や意向を取りまとめ、政府の施策に反映させることでスーク・シラーハの文化遺産を持続可能な形で保存と活用が可能となると考える。
- これまで開催してきた9つの要素からなるワークショップを4つのテーマに集約した。ごみの収集やまちの美化、住民の積極的な参加の重要性、災害に備えたまちづくり、歴史的な建物の再利用、物理的でない遺産の活用、市場のニーズにあった工芸品の創作、歴史的な建物や空き地をどのように社会事業や観光などの経済活動に利用し保全していくかなどを話し合ってきた。
- 本日のシンポジウムには、観光考古省をはじめとする政府関係者も参加しており、4つのグループからの成果の発表を基に忌憚ない意見交換がされることを期待している。

深見氏

- スーク・シラーハについての活動記録をまとめた2冊の本を制作したので、参加者にはぜひ中身を見て欲しい。
- 制作した本の1冊には、現在の状況と将来のスーク・シラーハの姿が描かれている。
- もう1冊には、昨年6月から今年の2月までのワークショップの結果を記録した。みなさんの発言や意見も掲載している。
- これらの記録を基に、みなさんの参加によるまちづくりを進めてもらえることを期待したい。

□ファシリテーター講座修了者への修了証書授与

連氏

- このコースは、11回の講義と9回の住民ワークショップで構成され、8回以上の講義受講とレポート提出、1回以上の住民ワークショップへ参加した者に対してJCAABEから修了証が発行される。
- 修了証書の授与に先立ち、これまでの11回のファシリテーター講座を振り返ってみる。
 1. ファシリテーターとは何か（連）
 2. ファシリテーションの手法（連）
 3. 事前復興まちづくり（市古）
 4. 市民と協働するための手助け（松村）

5. カイロのイスラム建築の特徴（深見）
 6. エリアマネジメント（宍戸）
 7. 文化遺産ハードとソフト（岡田）
 8. 建築保存と景観（苅谷）
 9. 川越の伝統工芸とまちづくり（荒牧）
 10. 住民参加による遺産の持続可能な活用（磯野）、我が街ルール（連）
 11. ヴァナキュラー建築と建築家の役割（布野）
- 続いて、ファシリテーター講座修了者へ修了証書の授与を執り行った。

□グループワーク

- コミュニティからの参加者は、以下の4つのグループに分かれ、スーク・シラーハの課題に対する解決策についての提言案を話し合った。
 1. 公共サービス（交通、ごみ処理など）
 2. リスクマネジメント（歴史的建物の再利用）
 3. 無形文化遺産
 4. スーク・シラーハの経済再生

□グループワークの結果発表

グループ1：公共サービス（交通、ごみ処理など）

- スーク・シラーハを歩行者優先道路とする
- ルートを定める等の手段によってトゥクトゥクの通行量を減らす
- 自動車の通行が可能な時間を制限する
- 店舗が道路を商品販売などに使うことを規制する
- 大きな駐車場を作る
- 現在の消防署が遠いので、近くに消防署を作る
- ごみの分別や食用油のリサイクルの推進（ただし、分別するデポはスーク・シラーハの外に）

グループ2：リスクマネジメント（歴史的建物の再利用）

- 街灯の整備と美化
- 電気と水道の配管を別々にする
- サビールの貯水槽を防火用水として再利用する
- 学校を避難場所に指定し、必要な整備を行う
- 火事を防ぐためにごみの分別を導入し、廃棄場所を指定・規制する
- 歴史的な建物を本来の役割に戻して利用する
- クッターブを売店、塾・教室などに利用
- ハマーム、サビールをアートセンター、オープンシアターなどに再利用する
- 行政に任せればよいという住民の意識を向上させたい
- 緑の多い街にしたい
- 問題を報告するホットラインを作る（ごみの不法投棄、水道管の破裂など）
- 皮革工房などの防火対策の定期的点検制度の導入

グループ3：無形遺産

- 子どもの頃からここで暮らしてきた
- 文化遺産や伝統工芸だけではなく意識やマナーなども伝承していきたい
- 道路の整備もしたい、大型モニターを設置し、見どころなどの紹介を流す
- 携帯電話だけでなく、頭脳や五感を使ってヘリテージを生かすことを考えて欲しい
- エジプトの様々な飲み物もヘリテージである
- 鳩のフンを髪につけると養毛剤になる

- ラマダン中の伝統行事を継承していきたい
- エジプトの伝統的な人形を復活させる
- エジプトのことわざ：「壺をひっくり返しても娘は母に似る」
- ドアに大小2つのドアノッカーがあり、男女の訪問者によって使い分けをしていた
- 病人のいる家に黄色い花を飾る（近隣の人たちが騒音に配慮、見舞いをする目安となった）

グループ4：スーク・シラーハの経済再生

- ハマームを再興し、その前の広場を伝統的料理や手芸品の展示場として使う
- サビールをクッターブかこどもの図書館として復活させる
- スーク・シラーハは、ひとつのオープンミュージアムである
- 住民たちによる観光を振興するため、文化センターを作って魅力を発信する
- 若い人たちがスーク・シラーハの外に出て行かないでも済むように伝統工芸を継承する
- 町工場や商店などを再興する
- 空き家や老朽化した建物を活用し、住民の集いの場を設ける
- スーク・シラーハの魅力を紹介する住民による観光プログラムを創出し振興する
- 学校を通じて地元の魅力を発信する、学校で伝統工芸を教える

□結果発表に対する意見・講評

Mohamed Soleiman 氏

- サビールの貯水槽を防火用水として再利用するという提案があったが興味深い。
- エジプトは雨が少ないので参考にならないかもしれないが、日本の京都では道路に降った雨水を集めて防火用水に利用している。

塚崎氏（日本大使館広報文化センター長）

- 初めてスーク・シラーハ地区とバイト・ヤカンを訪問した。
- コミュニティの課題を解決していくことは容易なことではないが、みなさんが活発に議論している様子と熱意を感じることができた。

荻谷氏

- 過剰なトゥクトゥクなどの交通問題、ごみの処理と分別、消防署の問題など、住民から具体的な提案が聞けて良かった。
- 歴史的建造物の保存と活用とともに、伝統工芸を継承していこうという意欲を感じた。
- スーク・シラーハを素晴らしい町にして、多くの人が訪れるひとつの観光地にしたいという意向には賛成したい。

岡田氏

- 今日新しい話を聞くことができた。
- このようなコミュニティの交わりを続けていくことでより良い住環境につなげていくことができると確信した。

連氏

- まちづくりファシリテーターコースを受講されたファシリテーターが住民の意見をまとめている姿をみて嬉しく思う。このように住民と専門家のアイデアをブレンドすることが大切である。
- スーク・シラーハには歴史的な建物があり、観光ということも考えて活かしていくことで経済的にも持続可能な街づくりにつながることに期待している。

以上のように、シンポジウムでは、コミュニティ、ファシリテーター、行政を含むその他の関係者、日本から遠隔で参加した専門家の間で有益で活発な意見交換が行われ、スーク・シラーハの将来像に

対する方向性が共有された。

今後は、コミュニティからのメッセージが単なる願望や要望に留まることなく、それをどのように具現化していくかが問われることになる。様々な制約がある中で、これらを実現していくためには、資金的、人的な投入リソースに裏付けられた具体的なアクションプランが不可欠となるであろう。

本日のシンポジウムが新たな出発点となることを期待してやまない。

□エジプト側が用意したシンポジウムについてのプレスリリース

2023年3月5日（日）、観光遺跡省財務行政担当大臣補佐官イハブ・サーレム少将は、バイト・ヤカンで開催されたコミュニティによるシンポジウムに出席した。メヌーフィア大学の建築と遺産保存の教授であるアラール・ハブシ博士は、オーラ・サラール・サイード工芸学校に勤める夫人とともに参加を歓迎した。

ダルブ・アフマルのコミュニティメンバーが参加するプロジェクト「カイロ旧市街の持続可能な保護策のための事業/住民参加のまちづくり（日本文化庁文化遺産保護国際貢献事業）」は、これまでの2年間、月例ワークショップを通し、文化遺産を再利用することで遺産地区の環境、社会、経済的利益を踏まえて活性化するため、地域の改善と活性化、および生活の質の向上のために共同で詳細なビジョンを話し合ってきた。

シンポジウムでは、スーク・シラーハの女性と男性グループの代表により、プロジェクト期間中に提案された計画が発表された。これらには、公共サービスの提供にコミュニティがどのように参加するかが含まれる。歩行者のための都市構造を考えると、ごみを分別しリサイクルすることで廃棄物を管理する方法、それから利益を得る方法、老朽化した建物や施設の再利用法、インフラの欠陥などを持つ都市構造から引き起こされる災害リスクを回避すること、特に歴史的資産を再利用することが検討された。バシュタク公衆浴場、ルカイヤ・ドウドウの給水所、マンジャク・シラフダール邸の門などの歴史的資産を、この地域の住民や訪問者のために、また観光客にとっても通りを特徴付ける歴史的モニュメントとし、これらの遺産の維持における社会の役割を活性化する方法も検討された。また、ダルブ・アフマルで人気のある食べ物、オリジナルな習慣と伝統、伝統工芸に代表される無形遺産が地域に利益をもたらし、投資をひきおこすという社会的ビジョンと、コミュニティ観光の推進による地域経済の活性化、空き家の有効活用も検討された。

プロジェクトでは、この包括的ビジョンをアラビア語と英語の小冊子にまとめ、これらすべての軸を図面と詳細な記述にまとめた。コミュニティをサポートするファシリテーターは、それらの準備と編集を助けた。小冊子は、すべての参加者、特に地域社会のメンバーに配布された。このビジョンを確立する上で積極的な役割を果たす証であり、近い将来、ビジョンを実現するための指針となる。

プロジェクトの専門家である国際開発センターの磯野氏と日本学術振興会カイロ研究連絡センターの深見氏が、講習を受けたファシリテーターひとりひとりに修了証書を授与した。日本大使館情報文化センター長の塚崎氏は、シンポジウムに参加できなかった岡浩大使の代理として、プロジェクトへの支持と激励の言葉を伝えた。加えて、日本建築まちづくり適正支援機構の連代表理事、小山工業高等専門学校名誉教授の苅谷氏、国士舘大学名誉教授で日本イコモス会長の岡田氏からも講評を得た。

シンポジウムに出席したイハブ・サーレム少将と観光考古省の幹部職員たちは、スーク・シラーハのコミュニティの女性たちが用意した料理を賞味しながら、カイロの歴史的に最も重要な地区のひとつであるスーク・シラーハで持続可能な開発を目指すビジョンを共有することができた。